

迫りくる地球の危機 2026年がレッドライン？

2024年6月29日の講演（新宿）の記録

グッチ

もくじ

第1部 ナスカミイラの真相 [スティーブン・グリアが解明 youtube](#)

第2部 ETの精神文明を考察する

1. [簡単な論者の自己紹介](#)
2. [ETの精神進化をイメージする](#)
3. [大事な認識：ETは精神進化を遂げた存在である](#)
4. [日本の天文学者、池内了さんの『宇宙人はいるのか』](#)
5. [論者のUFO関係の著作](#)

第3部 軍産複合体 USAPs の脅威

1. [USAPsについて](#)
2. [USAPsの活動に加わっている航空企業](#)
3. [財源](#)
4. [USAPsの主な活動](#)

2023年6月の二度目のディスクロージャー

[地球外文明が引いたレッドライン](#)

参考資料：ディスクロージャー前のインタビューで

グリアが2024年3月のセミナーで明かした USAPs の脅威

1. スカラーパルスシステムの威力

- 1) スカラーパルス砲でET宇宙船をどのように撃墜しているか
 - a) ET宇宙船が三次元世界に浮上するさいニュートリノ光を放射する。
その放射を検出する装置で宇宙船出現をキャッチする。
 - b) ET宇宙船を念動力でハイジャックする。
 - c) ET宇宙船にスカラー砲を浴びせると、無重力場を失った宇宙船は墜落する。
- 2) 悪徳グループが小惑星を地球に衝突させようとしたが、ETたちがそれを阻止した。
- 3) 悪徳グループは人工地震も起こせる。
- 4) グリアたちが呼び出したET宇宙船を悪徳グループがスカラー砲で撃墜しようとした。

4)についての論者のコメント

ドクターBの証言

2. レッドライン2026年はET側からの通告だった。

追記

以上もくじ

第2部 ETの精神文明を考察する

1. 簡単な論者の自己紹介。

大学で長いことドイツ語とドイツ文学を教えてきたグッチです。

研究対象は人智学のルドルフ・シュタイナーの霊的世界観。



シュタイナーの『神秘学概論』『ニーチェ』などを翻訳。



UFO・異星人に関しては小学生の時から興味をもってテレビの UFO 特番や本を読んでいた。

2001年のグリアのディスクロージャーについて連絡はもらったけれど、

深く調べないまま年月がすぎ、

2014年になって Steven Greer の「UFOテクノロジー 隠蔽工作」を読んで、情

報操作のない事実を知ることになり、グリアが創始した地球外知性研究センター（C

SETI) 会員となる。



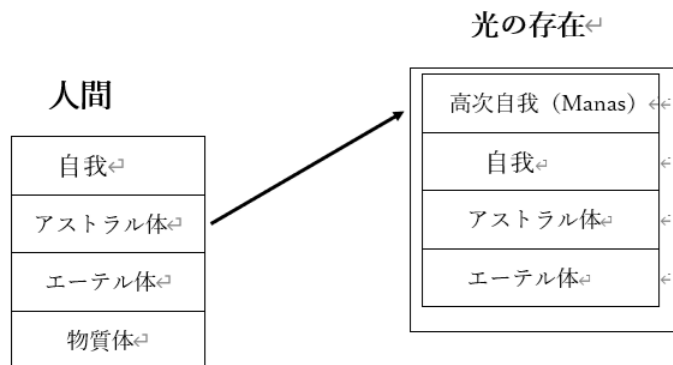
グリアはTM瞑想法のマスターでもあり、アストラル体、アストラル界などの神智学用語も使うが、シュタイナーの精神科学に親しんでいる者には何の違和感もなかった。

またシュタイナーの精神進化論も、地球外の知的生物の精神進化を理解するのにとても役立っている。

2. ET の精神進化をイメージする

感情の揺れを克服し、澄明な意識を醸成してくと、感情の担い手であるアストラル体に変化して（マナス）という高次自我が形成されていく。

善い行いをしても（善行を積んだり）、マナスは成長する。



現在の人類はまだまだ自我そのものも、不完全でいろいろなマイナス要因によって本来の精神進化を遂げていない。

系外惑星の、地球外知性存在の中には既に高次自我が完成する途上にある存在もあると思われる。

争いをせず澄明な意識を所有し、宇宙の平和を願う知性存在は、今にも自滅しそうな地球と違って、数万年、数十万年の文明を継続し、驚異的なテクノロジー、数億光年の距離を別次元に移って一気に飛び越えるような、SF 的テクノロジーをもっているもおかしくない。

私のコンタクト活動としては Tokyo ET Contact Group に加わり、

グリアが提唱する ET コンタクト法である CE-5 (Close Encounters of the Fifth Kind) を学んで実践。

2014 年～2019 年まで 31 回イベントに参加した。

数々の非日常的体験を積み、E Tが地球に来ていることを確信できた。

flash bubble(閃光球)の出現を見たのは数限りない。

2017年の夏に大量の閃光球が現れたときは、その光に深い慈愛を感じた。

彼らが高次の精神をもった存在であることが確信された。

このとき、楕円型のET宇宙船も双眼鏡で目撃された。

注：flash bubble（閃光球）とはこちらからの呼びかけに応じて夜空の一角に現れる光球。1～2秒間同じ位置で光量をパワーアップする。点滅して移動する航空機や、夕方に点滅せずに直線上を移動する人工衛星とは異なる。ET宇宙船が次元間歪空間から3次元空間に出現するときの光だという説もある。

3. 大事な認識 ETは精神進化を遂げた存在である

地球を訪問できるほどの異星文明は戦争などしない高い意識と精神文明をもっている。

地球を訪問できるほど数千年、数万年も文明が進んでいるETたちはテクノロジーの進化と精神進化が同期しており、侵略など考えない高次の精神に達していることが確実である。

自国の上空に無断で侵入した者は攻撃するのが当たり前というような動物的なテリト

リー意識が一般化している地球人の精神進化はまだ動物的なものから脱していない。

安全保障というようなシステムは隙があれば侵略しようとする地球の国家同士なら機能するだろう。

しかし高次の精神に達している異星文明からの平和な訪問者を侵略として攻撃するとすれば、それは野蛮の極みである。

地上では戦争の歴史が繰り返され、兵器の製作がテクノロジーの進化を促してきた。

しかしテクノロジーの進化に見合った精神進化は全くなかった。

人類を何十回も滅ぼすことができるほど大量の核兵器が貯蔵されている地球世界。

テクノロジーの進化と精神進化が同期していない文明は自滅するしかない。

戦争をするような野蛮さが克服されて初めて、文明が数万年、数十万年続く。

現在地球を訪問できるほどの地球外文明は、地球の文明より数万年、数十万年進んでいるはずである。

注：グリアによれば何十機も UFO を撃墜され、たくさんの ET たちが殺されている。

しかし彼らは人間ならしそうな報復は全くしていない。

4. 日本の天文学者、池内了（さとる）さんの『宇宙人はいるのか』（1996年、かもがわ出版）の見解



池内氏はこの著書のなかでこう言っている：

「近代文明を獲得して以来ほんの200年しか経っていない。宇宙人がやってくる
と、スワ戦争だと反応するのは、知らぬ人にガブリと咬みつく犬と同じレベルだ。

戦争と言う怪物を人類はまだ心の中から追放していない」

人類が2万年も文明を続けるためには戦争という無意味な殺し合いをやめていないと
いけない。

2万年続く文明は「私たちが持っていない多くの新知識や新技術を発見し開発してい
るだろう。私たちが逆立ちしてもおいつかないくらいの高度な文明を切り開いている
だろう。そのような知的に発達した人類へ進化したならば、隣の星へ短時間で旅行で
きる飛行技術を獲得しているかもしれない。」

「だからもし宇宙人が地球にやってくるとすれば、私達に比べ格段に「進化」してい
る人類だろう。

そんな人類が戦争をしかけてくるだろうか。とっくの昔に戦争を放棄して高度の文明

を獲得している人類なんだから、戦争や侵略という概念はもはやもっていないだろう。ところが私たちはまだ戦争を続けている未開の人類なので、つい宇宙人が侵略してくると思ってしまう。私たちは相手も自分と同じ程度だと考える癖がついているので、「宇宙戦争」などと発想してしまう。自分がバカだから相手もバカだと思ってはいけない。宇宙から人類がやってくるなら、それは私たちが足元にも及ばないくらい高い知性の持ち主と思うべきだ」と。

以上引用

私も彼らは既に高い精神文明をもち、侵略も報復もしない平和なひとたちだと確信している。

これは実際に ET と会ったこともあるグリアの見解でもある。

私はコンタクトイベントで出現した慈愛に満ちた光にはっきりそれを感じられた。

UFO、ET 問題に関し、この認識が欠けた安全保障的な議論は極めて地球的な議論である。

5. 論者の UFO 関係の著作

1986年11月、アラスカ上空で日航ジャンボ貨物機が巨大 UFO に追跡された事件について、米国の公文書館から出てきた機密文書があり、それに基づいてデジタル書籍を Amazon で出版。

UFO&日航機で検索するとヒットする。



これはプリントアウトして寺内機長にも送った。

私も知らなかったことが載っているとわれ、8通の手紙のやりとりをし、事件後の体験についても教えもらった。

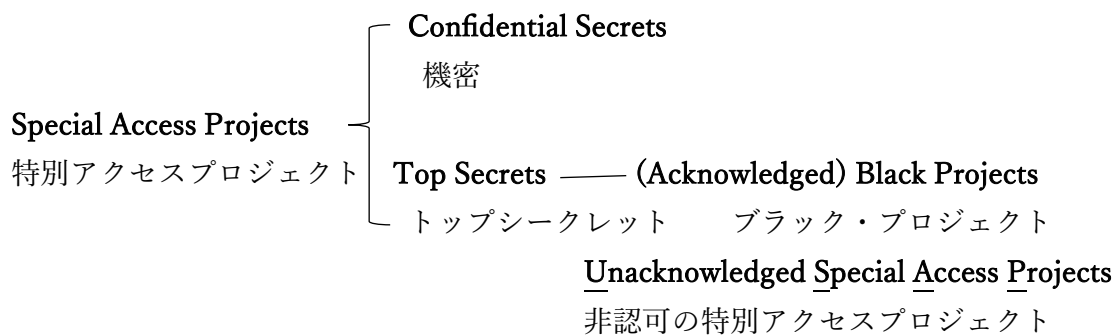
第3部 軍産複合体 USAPs の脅威

1. USAPs について

グリア氏が人類の敵とみなしているのは軍産複合体から生まれた組織であり、彼はその組織をUSAPsと呼んでいる。

USAPsとはUnacknowledged Special Access Projects「非認可（未承認）の特殊アクセスプロジェクト」の略。主にペンタゴン内に潜んでいて、議会や大統領もアクセスが出来ない非合法的な特殊プロジェクト。

ペンタゴン内の非公開プロジェクトのレベル：



説明

Special Access Project (SAP)「特殊アクセスプロジェクト」はコード名や番号をもっていて、クリアランスをもっている人物しかアクセスできない。

この特殊アクセスプロジェクトの中に、Confidential Secret「機密」と Top Secret「トップシークレット（極秘）」がある。

Top Secret「極秘」のプロジェクトのうちの一部に両院の主要メンバーや、場合によ

っては大統領や国家安全保障局の監督下におかれた **Black Project** 「ブラック・プロジェクト」というコード名のない極秘プロジェクト（合法）がある。

この Black Project の予算は議会に開示されない。予算そのものが極秘になっている。

大統領や議会のトップが知っているプロジェクトなのでいちおう合法。

つまり acknowledged 「認可（承認）されている」。

Unacknowledged Special Access Projects 「非認可（未承認）の特殊アクセスプロジェクト」は大統領や議会のトップたちも知らない、Unacknowledged 「非認可の」特殊アクセスプロジェクトであり、非合法的な闇のプロジェクトである。

注：米国防情報局副局長だったウイルソン提督はペンタゴン内のこの闇プロジェクトの存在を知り、アクセスしようとしたが、拒否された。ペンタゴン内の監督委員会に訴えたら、逆に降格させられそうになった。

この件についてはネットにファイルをアップしてあります。

[（エリック・デイビスの覚書についての解説）](#)

覚書は[エリック・デイビスの覚書](#)（ ）

この闇のプロジェクトに参加している者たちは米国憲法に従わない不法者たちであり、その出自は議会、ペンタゴン、CIA、ホワイトハウス、NASA など、あらゆる政府機関にまたがっている。

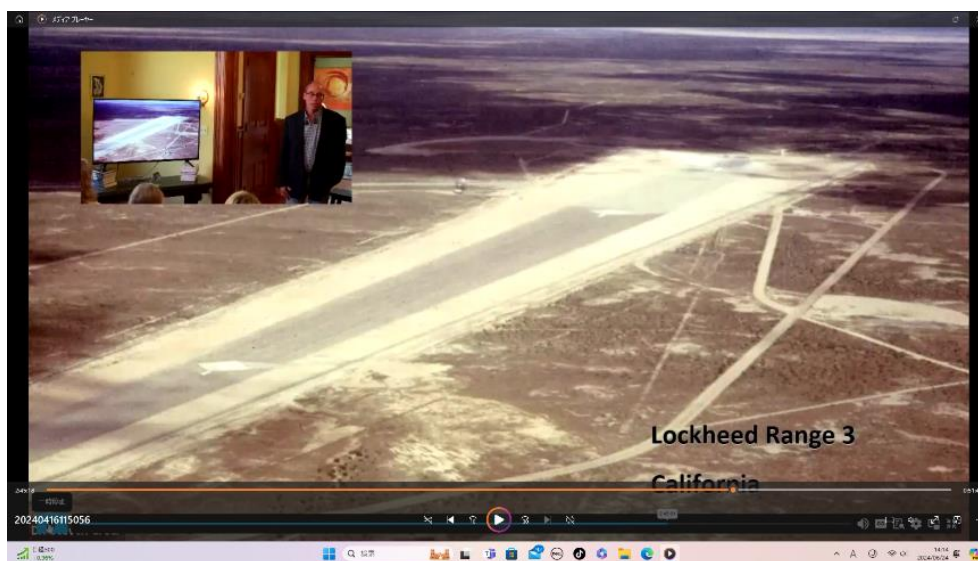
米国内に分かっているだけで151カ所に関連施設があり、米国外にも、世界中にもある。

なお、2001年のディスクロージャーのデータを更新した著作『非認可の世界』（2017年）もある。



2. USAPs の活動に加わっている航空企業

なお、USAPs の活動には特殊なテクノロジーを扱う企業、ロッキード・スカンクワークスやノースロップ・グラマン・アエロスペースなども加わっている。



52

この写真は荒野にあるロッキードの施設の1つ。滑走路ではない。

ひし形の箇所が複数あるが、制作した人工 UFO の ARV (Alien Reproduction Vehicle) がそのひし形から飛び出して、上空からスカラー砲を撃って検証する実験場。実際に ET 宇宙船を追跡して撃墜するのにも使われている。



(2023 年 6 月のディスクロージャーで公開された USAPs がらみの米国内の 151 拠
点)



(世界中にちらばる拠点の図) 韓国はソウルにある。

3. 財源

この USAPs がどのように資金を獲得するか。

たとえば B2 ステルス機開発に 15 ～ 20 億ドル、オスプレイ開発に 10 億ドルの予算を請求し、実際はたぶん数億ドルくらいしか使わず、その残りを違法な資金に回すという手口を使っている。

4. USAPs の主な活動

- 1) 組織は何層にもなっているが、コアにはキリスト教系の終末思想に染まった者たちがいて、聖書が予言している来世を早く実現させるために世界を滅ぼすアルマゲドンを起こそうとしている。
- 2) 開発したスカラー砲によって E T 宇宙船 (E T V) を撃墜し、その高度なテクノロジーをリバース・エンジニアリングする。
その成果で反重力装置を作り、地球製 UFO (A R V) をエリア 51 などで行実験。
制作にはロッキード・スカンクワークスなどが参加している。
小さなプルトニウム原子炉を積んで飛ばしている。
- 3) A R V で人々を誘拐 (アブダクション)、一時はキャトルミューティレーションも行い、人々にエイリアン=恐ろしい侵略者のイメージを植え付ける。
そして頃合いを見計らって、A R V などを使い、エイリアンの襲来を偽装してアルマゲドンを起こすことを計画。

注：USAPs はなんとも巨大な組織である。グリアはほぼ単独でこの組織と闘っている。グリアはペンタゴン内に潜む USAPs の関係者と 1992 年ごろから対峙し、彼らと直接渡り合ってきた中で、USAPs 内部からグリアのために極秘の活動内容を証言しようという者も出てきた。

2023年6月の二度目のディスクロージャー

そのディスクロージャーでグリアが発した警告：

THE EXTRATERRESTRIAL REDLINE

- ISG HAS TECHNOLOGY FROM REVERSE ENGINEERING ET CRAFT THAT HAS THE CAPABILITY TO BE A SERIOUS THREAT TO THEM VIA QUANTUM ENTANGLEMENT
- AT LEAST 119 ET CRAFT HAVE BEEN DOWNED NEAR OR OVER EARTH
- EM SCALAR WEAPONS CAN POTENTIALLY REACH BEYOND OUR SOLAR SYSTEM
- THESE ROGUE ISG OPERATIONS POSE A THREAT TO BOTH ET AND HUMAN CIVILIZATIONS
- THERE IS AN IMMINENT RISK THAT THESE ISG ROGUE OPERATIONS COULD CROSS A REDLINE REQUIRING AN ET RESPONSE TO PROTECT INNOCENT LIFE ELSEWHERE AND ON EARTH
- WHILE THIS RESPONSE WOULD BE SELF DEFENSE AND PROTECTIVE, IT RISKS BEING DELIBERATELY PORTRAYED AS AN "ALIEN ATTACK" (PRIOR PROTECTIVE ET INTERVENTIONS REGARDING NUCLEAR RISKS HAVE ALREADY BEEN DELIBERATELY WRONGLY PORTRAYED FOR PSYCHOLOGICAL WARFARE PURPOSES)
- THEREFORE, IT IS IMPERATIVE THAT THE PRESIDENT, CONGRESS, THE PENTAGON AND OTHER U.S. GOVERNMENT AGENCIES OBTAIN IMMEDIATE COMMAND AND CONTRPOL OVER THESE PROJECTS

地球外文明が引いたレッドライン	
	影の政府は ET 宇宙船の解析調査で得たテクノロジーを所持しており、その量子もつれによってETたちに対する深刻な脅威となる可能性をもっている。
	少なくとも119機のET宇宙船が地球近辺または上空で撃墜された。
	電磁スカラー兵器の破壊力はポテンシャルとしては太陽系外まで届く。
	これら影のならず者政府の行為はET文明、地球文明の双方にとって脅威となる。
	この影のならず者政府の行為がレッドラインを越して、ET側の防衛反応を呼び起こす差し迫ったリスクが存在する。ET側は地球外や地球上の罪なき生命を守ろうとするだろう。

	この反応は自己防衛であり自己保護的なものだが、故意に「エイリアンの攻撃」とされてしまうリスクがある(ETが核兵器のリスクを予防的に無くす介入をしたとき、この介入は心理的軍事目的で故意に間違った描写をされた。)
	それゆえ、大統領、議会、ペンタゴン、その他米国政府の各部門が、陰の政府のプロジェクトをすぐさま指揮統制下に置くことが必須である。

参考資料：

グリア氏がディスクロージャー前のインタビューで述べた地球のリスクが高まるレッドラインについて（話し言葉なので、かなり意識する）

核爆弾が最も強力な武器だと思うなら、それは大きな間違いである。

巨額の資金を投入して研究し、地球外星間文明のテクノロジーを学習することによって、量子もつれを使った武器が開発されている。

量子もつれを使うと、A 地点から B 地点に瞬時に移動できる。

A 地点から B 地点への距離が光の速度で何年かかる場合でも瞬時に行ける。

A 地点と B 地点の距離は消滅する。

この原理を用いたスカラー砲を軍産複合体 USAPs は使用している。

そして地球上空や、地球近傍の宇宙空間、さらにはかなり遠方の宇宙空間にいる ET
宇宙船をも攻撃した。

この武器が 1990 年以降進化しており、ET たちがどの時点で自分たちの惑星を守る
ために行動に出るレッドラインがやってくるかという問題がある。

量子もつれを使ったスカラー砲の破壊力は空間距離に関係なく瞬時に到達するので、
何千光年離れた惑星でも一瞬のうちに攻撃されてしまう。（注：時空を切り裂く）

地球上のすべての地点も危険に晒されている。

この悪徳集団は宇宙を危険に陥れているが、ET 文明はこの集団に対する反撃をできる
だけせずに、地球を救おうとしている。

よく言われることだが、なぜ ET たちは直接手を下して問題を解決しないのか？

それは第一に世論操作に長けた人物たちとか、ペンタゴンの回し者とか、そして主流
メディアまでもが、エイリアンが侵略してきたと言いふらすからだ。

そして防衛のために何兆ドルもの資金を要求するのだ。

この脅威論は偽物である。

もし ET たちが何もせず、我々が USAPs の違法なプロジェクトの路線に乗ったままだと、ET たちの世界に危険が及ぶ。

E T たちが脅威なのではなく、脅威は地球人が自分たちの手で作りだしている。

E T たちは手をこまぬいている。

悪徳集団を攻撃すれば、映画『インディペンデンス・デイ』のようなエイリアンの侵略が始まったと見なされるだろう。

地球外文明の宇宙船や施設を狙って破壊する行為は決して良い結果を生まない。

E T たちが反撃に出て高次に進化したテクノロジーを用いて U S A P s を無力化したとしても、メディアは C I A からの偽情報を垂れ流すだろう。

真っ先にエイリアンの侵略だと叫ぶのは、ユーフォロジストたちかもしれない。

彼らはアブダクションやミューティレーションの真相を学んでいないのだ。

これは C I A や U S A P s がエイリアンの仕業に見せかけてやった行為である。

このことは既に 1 9 8 0 年代から知られていたことだ。 以上。

グリアが2024年3月のセミナーで明かしたUSAPsの脅威

グリアは2024年3月のセミナーで、これまで内部通報者を守るために公表してこなかったUSAPsの恐ろしい能力についていくつも明かした。

グリアの著作を読み、会員向けの報告にも目を通してきた私ですら、驚愕の連続だった。

何の予備知識もなしに聞くと、SFとしか思えないような内容であり、リアルさを伝えるのは極めて難しいが、躊躇している余裕はもうない。

以下、グリアが述べたことを引用したり、要約してお伝えすることにする。

1. スカラーパルスシステムの威力

1) スカラーパルス砲でET宇宙船をどのように撃墜しているか

- a) ET宇宙船が三次元世界に浮上するさいニュートリノ光を放射する。

その放射を検出する装置で宇宙船出現をキャッチする。

内容まとめ

ET宇宙船は次元間亜空間を航行してから三次元世界に浮上するさい、ニュートリノ光を八方に放射する。

天才を特別の方法で養成し、ニュートリノ検出装置を作らせ、その装置でET宇宙船が三次元世界に出現した瞬間をキャッチする。この瞬間は宇宙船がもっとも無防備なとき。

グリアの話

もうひとつの例として。私がニュートリノ光システムの発明者から聞いたことを述べよう。

このシステムは1970年代初めに始まったゲームチェンジャーだった。

なぜそうだったのかをこれから述べよう。

60年代にはET宇宙船を狙うプラットフォームや人工衛星が既にあった。我々のもとに協力してくれた証人の1人はヒューズ・エアクラフトや、その他、大手の防衛関連企業で働いていた。

彼はカリフォルニアに住んでいた。

それは1965年のことだ。彼は年配の男性で天才だった。

彼はアレクサンダー・グラハム・ベルの子孫（たしか甥）であり、非常に高い知能の持ち主だった。

彼は生まれた時からMKウルトラ計画タイプのプログラム下におかれ、機密プログラム開発のためにさらに知能を高めるような洗脳を受けた。

注：MK ウルトラ計画（作戦）：

CIA 科学技術本部がダビストック人間関係研究所と極秘に実施していた洗脳実験のコードネーム（Wiki）

彼は自分が非常に強い精神的ダメージを受けていることを認めていた。そして私は彼の存命中は彼の名前を伏せてきた。

彼の経歴は一般人には聞くに堪えないものである。

彼はこう言った。我々は地上、船舶、空にこのシステムをもち続けている。

しかし最も重要なのは宇宙船を検出し撃墜できる人工衛星だった。

電磁パルス発生装置の類である地上設置の電磁波システムもあるが、その 10 年後に米国家偵察局（NRO）がニュートリノ光システムを人工衛星に搭載した。

これは宇宙船が 3 次元空間に出現するポイントを検出できるものだ。

E T 宇宙船が次元間歪空間を光や電子やブロイ波の速度を越えて進んでから、3 次元空間に出現するとき、ニュートリノ光が発生してそれが宇宙にまき散らされる。

このニュートリノ光の発生はニュートリノ光検出装置で検出できる。

この装置は南極やその他の場所に設置してある。

1970 年代初めに既に設置してあった。

（以下、グリアのコメント）

それが 50 年前のことである。

60年代から70年代にかけて、正確に追尾するだけでなく、どんどん洗練されていくシステムによって、ET宇宙船を撃墜するテクノロジーが、地上、海上、大気圏、そして宇宙空間でも長足の進歩を遂げた。（以上第8セッション）

b) ET 宇宙船を念動力でハイジャックする

内容まとめ

テクノロジーや麻薬でテレパシーやサイコキネーシスの能力を引き出した人たちを使って、念動力でET宇宙船のナビシステムをハッキングし、ハイジャックし、スカラー砲の照準に誘導する。

グリアの話

違法グループは貧しい地域に行って人々を集め選別し、テクノロジーや麻薬を使って彼らからテレパシーやサイコキネーシスなどのESP能力を引き出している。

そのプログラムはP3 作業者（operatives）という。

その人たちがP3オペレーターとして施設に閉じ込められて異星宇宙船のナビシステムをハッキングする作業をさせられている。

そして異星宇宙船をハイジャックし、スカラー砲の照準域に誘導して撃ち落としている。

閉じ込められてこの作業をさせられている人たちの多くは死亡するか、昏睡状態に陥ってから死んでいる。生き残った者も心に深い傷を負っている。

最近施設から逃亡してきた人たちが、現在グリアのもとで働いている。

以下、グリアの話をそのまま引用。

「私はE T宇宙船に対する攻撃をしている2つの施設を実際に見たことがある。

これらの施設のどちらも年に1機か2機のE T宇宙船を撃墜している。

したがって2つ合わさった複合施設としては年に2機から4機の宇宙船を撃ち落としていることになる。

この2つの施設は互いに少し離れていて、私はヘリコプターで行き来し、施設上空でホバリングした。

この施設の存在はまたひとつの大きな問題を提示すると思う。

それは人権を損なう残虐行為がそこで行われているということだ。

それはP 3オペレーターとなるよう強制された貧しい人々の身に起こっている。

その人たちの大多数は死亡している。死なずに済んだ人たちもいる。

死なずに済んだ人たちの多くは昏睡状態に陥り、死の床にある。

生き残り身体機能を維持していてもダメージを受けている。

そのうちの何人かは施設を逃げ出し、我々のもとに避難し、我々の取り組みに協力し

てくれている。

それはほんの4、5か月前に起こったことだ（注：このセッションは今年3月14日に行われている）

さて、このように初期のレーダーや初期の電磁システムに始まり、私が述べたような2023年、2024年の状況へとことは進展している。

この間、USAPsのテクノロジーの進化は非常に急な上昇カーブを描いており、ET宇宙船を追尾、撃墜、回収する能力の全体がレベルアップしてきている。

地球外文明もこれを黙って見過ごしているわけではない。

攻撃に備える対応策を次々にとっている。

しかし彼らがこの事態にうんざりし、見切りをつけた時が大きなリスクである。

私などは1993年のころからうんざりしている。

協力してくれている議員たちもうんざりしている。

それは下院議長に届いた手紙でも分かる。

6人か8人くらいの下院議員が2日前、特別調査委員会がUSAPsについて調査してくれるよう申し入れたのだ。

このことは我々がこのセミナーをやっている最中に起こっている。

しかし地球外文明が事態に我慢できなくなった時の方がリスクが大きい。

一方で彼らは我々が事態を収め、USAPsの作戦をやめさせることを望んでいる。

しかしこの問題を正したいと思っている正義の側の為政者や軍人たちの活動がどの範囲までできるのかを検討する必要がある。

U S A P s は極めて精巧なテクノロジーを所有し、そのシステムの崩壊を目指す人たちに対してそのテクノロジーを使用する可能性があるだけでなく、あらゆる航空機を撃墜できる精度を飛躍的に増しているのだ。

彼らの武力には攻撃用ヘリコプターや、F 1 6 や B 2 ステルス攻撃機などが含まれる。

どんなものでも照準に収め撃墜できる。

そのようなわけなので、我々は事態が取り返しのつかないところまで行く前にこの狂気の沙汰を正すにはどのようなシナリオがあるか考えていかねばならない。

デフコン 1（最高防衛準備態勢）が発令されている。

地球全体の破局の恐れがある危機だ。

これを正そうとしても、もぐら叩きのような状態になる。

我々の調査では彼らの秘密軍事施設や基地の疑いがある箇所は米国だけで 1 5 1 もある。

そのほかアフリカ、中東、ヨーロッパ、南米、アジアなどなど、それに宇宙にもある。

このすべてを相手にする大規模なプロジェクトになってしまう。

数名の有志の国会議員が集まって連中の作戦遂行に影響力を行使しようとするのとはけた違いの大きなプロジェクトになる。

去年議員たちと最初の話し合いをしたとき、長いだけでとりとめのない話になってしまった。

そんな議員たちも今では地球全体の規模で考える必要があることを理解している。

南極大陸、北極点などすべてだ。連中の施設は世界中に分散している。

この組織はグローバルである。

そして人員は常に施設間を移動している。この組織が広がる地図上を、地政学的線状を移動している。

この秘密のプログラムを遂行している人間たちが動いているのだ。

カナダと米国の間も自由に行き来するし、モンゴルと中国やロシアとの間もそうだ。

彼らはそのテクノロジーを使って、地球上を敏速に動き回っている。

ふつう国境を越えた侵入があればただちに捜索を受けるだろう。

ドローンを使ったり、古くはU2のようなスパイ航空機などを使った侵入のケースだ。

しかし電磁場を周囲にまとい時速数十万マイルで移動する手段をもっていれば、それを捕捉するレーダーなど存在しない。

これは本当の話だ。

そんなスピードとステルス性をもっていれば、誰が彼らを止められるだろうか。

世界中の既存の政府、中国政府であれ、ロシア政府であれ、オーストラリア政府であれ、こんなテクノロジーはもっていない。

正直言って、世界はこの陰謀団が牛耳っている。

テクノロジーの優位のせいだ。私がいつもまず第一に指摘しているのは、彼らがE T 宇宙船からリバースエンジニアリングを行い、その異星文明の先進テクノロジーを学習し、それを推進システムに用いるだけでなく、兵器システム、偵察システム、追尾システムにも用いているということだ。

そして我々が相手にしている組織はこれらのテクノロジーに 80 年間で数兆ドルの資金を注いでおり、世界の通常の政府ではとうていかなわない。

これがひとつのキーポイントだ。

しかしさらに彼らはその地球外テクノロジーを用いて非常なスピードで移動できる能力をもっている。

どんな追跡も振り切れる。

米国やそのほかの先進国はさまざまな装備や装置、最先端の兵器システムをもっているが、それでもこの秘密のグループのシステムには 5 千年から 1 万年は遅れていると思われる。」

(第 6, 8 セッション)

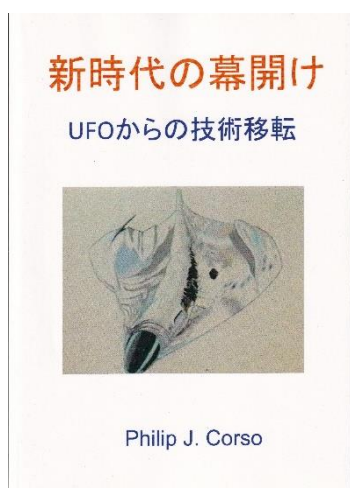
c) ET 宇宙船にスカラー砲を浴びせると、無重力場を失った宇宙船は墜落する。

内容まとめ

フィリップ・J.コルソ中佐の『新時代の幕明け UFO からの技術移転』から：

ET 宇宙船にスカラー砲を浴びせる。するとスカラーパルスの指向性粒子ビームが宇宙船の周囲の電磁波の形成を乱し、反重力場を突き破り、宇宙船は重力を受けて落下する。

スカラー砲によって宇宙船は破壊されず、墜落の衝撃だけを受ける。



コルソー中佐(Lieutenant Colonel)は1942年から欧州の米陸軍情報局に勤め、ローマ在の米軍情報局長になっていた人物。

最高機密を閲覧するクリアランスをもっていてETやET宇宙船のことを知っている。ET宇宙船を100%侵略者とししか考えない軍人)

2) 悪徳グループが小惑星を地球に衝突させようとしたが、ET たちがそれを阻止した。

内容のまとめ

アルマゲドンを目指す悪徳グループはスカラーパルスシステムを用いて小惑星の軌道を変え、地球に衝突させようとしたが、ET たちがそれを阻止した。

グリアの話

もう一つの事案についてコメントさせてほしい。

情報公開を望まない証人が話したトップシークレットの証言である。

彼は表に出られない事情がある。

彼はこの違法プログラムの中でも現在非常に高い地位にある人で、数年前にある作戦に関わることになった。

私はこの違法プログラムが破局を起こそうとしていることを、実行グループに属しているこの情報源から聞いたのだ。

彼らは重力子ビームに似た電磁波システムをもっていて、それを用いて大きな岩石のかたまりである小惑星を捕捉し、それを移動させることができる。

その作戦は小惑星が地球から見て太陽の方向にある時に決行するので、地球からは見つけられない。

彼らは小惑星を使って破局を起こそうとした。

それは大西洋と太平洋の上をすれすれに飛び、地球にぶつかることはなかった。

しかし、ぶつからなくてもうんと近くを飛ばせば津波を引き起こし、ヨーロッパや米国、アジアなどの沿岸都市を洗い流しかねなかった。

（注：海面を水切りのような状態でかすって飛ばせば津波は起こり得る。濃い大気との摩擦で爆発した場合は衝撃波で大きな被害を起こす）

そのような事態にならなかったのはひとえに宇宙の ET 文明側が小惑星の軌道に三次元的介入を行い、軌道を外したからである。

彼はこれが事実であることを知っている。私も事実だと知っている。

この秘密のプログラムが如何に危険なものであるか驚かれたなら、なぜ私が救急医を辞めたかがお分かりいただけるだろう。

このような破局はありえることだった。

（第 6 セッション）

3) 悪徳グループは人工地震も起こせる

内容まとめ

海溝にあるプレートがぶつかり合う箇所にスカラーパルスシステムの強力なエネルギーを放射すると巨大地震を誘発できる。

2004年のスマトラの M9.1 の大津波はその実験で起こった。25万人が亡くなった。

グリアの話

私がアリゾナ州フェニックスでレクチャーをしているときだった。

これから話すことはインドネシアの大惨事やヘレーラ氏と関係している。

数人の SP を連れた或る人物が古い車に乗ってアラスカからやってきた。

居場所を特定されるおそれがある機器はすべて排除していた。

つまり彼は私に伝えないといけないと思った情報を私に直接伝達したのだ。

彼は自分がしてしまったこと、関わってしまったことに強い恐怖を感じていた。

彼は米国家安全保障局 NSA がチャーターした船に乗っていた。船には軍需製品メーカー、レイセオン(Raytheon)のシステムが積んであった。

船はアラスカ沿岸からインドネシアへの航路をとった。

その船に乗せていたシステムについては、他にも空軍中佐が知っていた。

この人物は名前を公表している証人だが、この件についてはまだ話したくないようだ。

それで彼の名前は挙げないことにするが、ご理解いただきたい。

私は彼ら協力者とのつながりが断たれることを望まない。

情報の破壊力が大きいほど、それを伝えることには危険が増す。

彼らもそれが分かっている。

しかしこの特殊なケースは人々に知らせる必要がある。

国家の安全にかかわる事態、地球全体に関わる事態だからだ。

なぜなら、チャーターしインドネシアに向かった船には強力な志向性エネルギー、スカラーパルスを発する電磁システム一式が積んであったのだ。

プレートがぶつかりあっている海溝にスカラーパルスを放ち、海溝型地震を起こすために。

彼らはその実験をする任務を負っていた。

彼らはインドネシアの沖合にある海溝の上に行き、このパルスエネルギーを放出したのだ。

どのくらいの時間がかかったのかは私はよく知らない。

1回のパルスだったのか、数回だったのか、詳細は分からない。

それは巨大地震を引き起こし、大津波が起こって25万人が死んだ。

(中略)

このように、地震頻発地、特に海溝のあるところでは巨大地震が起こる。

その巨大地震の引き金をこの種のテクノロジーが引くことができるのだ。

こうして彼は車に乗ってはるばるアラスカからやってきて、彼に課せられたミッションの詳細を私に話してくれた。

なぜなら、彼は多くの人たちが災害に巻き込まれるような事態になるとは思っていなかったもので、自責の念にさいなまれていたからだ。

ミッションに参加したら、25万人の罪なき人たちを殺してしまった自責の念は想像に難くないだろう。

その船にはヘレーラ氏（注：詳細不明。Michael Herrera という名前が第6セッションに出てくる。この人はETの死体が入った木箱などを目撃した人）も乗っていた。

私はインドネシアの大惨事が違法な秘密作戦によって起こったことをヘレーラ氏に告げたが、彼はそのことを知らなかった。

（第5セッション）

4) グリアたちが呼び出した ET 宇宙船を悪徳グループがスカラー砲で撃墜しようとした。

内容まとめ

グリアたちが CE-5 の ET コンタクトで呼び出した ET 宇宙船をスカラー砲装備のボーイング747（VC-25）が撃墜しようとし、グリアたちのすぐ近くにスカラーパルスのしずくが飛んできた。

グリアの話

ロズウェル空軍基地をまた例にとろう。

この基地には追尾するだけでなく、攻撃もできる新型レーダーがあった。

それは電磁指向型エネルギー兵器である。

その兵器がどんどん強力になり、正確になり、洗練されてきたことを想像してみてもいい。

この兵器は人工衛星や航空機にも搭載されている。

私はこの目で目撃したのだが、シャスタ山でコンタクトをしている我々のチームの前に出現しようとしていたE T宇宙船をボーイング747（訳注：軍事用に改造されたVC-25のこと）が狙ったのだ。

747はエネルギー兵器から猛烈な放射をした。

その放射ビームが木々を貫き我々のいる場所から200ヤード（約180m）か、それより近いところにまで届いた。

そしてそのビームの一部が一瞬のうちにちぎれ、木の枝を貫いて落下し、地面に当たった。

すると周囲の空気や地面全体がブルブルブルと15秒ほど激しく震えた。

私は私のチームの誰かが電子機器のショートを起こし、それが茶色の光線を発したのではないかと思ったが、そうではなかった。

これは非常に不安を掻き立てる事態だった。

私はこの事件を直接体験した。私のチームも一緒に体験した。

このケースで幸いだったのは ET 宇宙船はまだ一種のプラズマ光状態であり、三次元空間に出ていなかったことだ。

その状態のときに攻撃されたのだ。

それで我々がエネルギー兵器の衝撃を目撃する直前に宇宙船は姿を消していたのだ。

宇宙船は我々に向かって（注：次元間歪空間を）来ていた。

シャスタ山の中腹 3 分の 2 くらいのところに来ていた。

我々のグループは ET 宇宙船撃墜が失敗した現場を直接目撃したのだ。

これは CE-5 コンタクトをする人たちに向けての警告でもある。

我々は常に ET たちにとって都合のよい形態、方法、時間、場所に来てくれるように頼んでいる。

（注：ふつうは日時、場所をイメージして送るのだが）

その方が彼らにとっても安全だからだ。

（第 8 セッション）

4) についての論者のコメント

私自身、グリアが提唱する ET コンタクト法である CE-5 を 30 回以上実践していたので、グリアの話は非常にリアルに感じられた。

友好的なコンタクトをしようと E T に呼び掛けて出現した宇宙船を U S A P s 側に狙われるというのは、言葉にできないほどの衝撃だった。

そこまで事態は起きているのか！！という心が焦げ付くような思いがする。

なおロズウェルの U F O 撃墜は 1 9 4 7 年。

それからなんと 8 0 年近く経っている。

ニコラ・テスラの発想に始まり、何十機と撃墜した E T 宇宙船のテクノロジーの研究の積み重ねが 8 0 年も続いている。

連中のテクノロジーはとんでもないレベルになっているに違いない。

グリアの推測では地球の最先端のテクノロジーより 1 万年は進んでいるだろうという。

参考：ドクターBの証言

『非認可』の eBook 56~59 ページにマッド・サイエンティスト・ドクターB の証言がある。

この人物は科学者兼エンジニアであり、反重力、化学兵器戦、セキュリティのための遠隔測定法、コミュニケーション、宇宙空間に設置した超高エネルギー・レーザーシステム、電磁パルス・テクノロジーなどを含む極秘プロジェクトに携わっていた。

彼の証言からボーイング 7 4 7 （軍用に改造された VC-25。なお大統領専用機のフ

ォースワンもボーイング747)が当時ET宇宙船を撃墜するための電子=プラズマ光ビームを搭載していたこと、その後EMP(電磁パルステクノロジー)開発の仕事をしていたことを語るくだりを引用する:

「ロックウェルとの契約によってNASAで日々を過ごすようになる前、私は自動制御論を研究していたが、その頃私はアイグラスというプロジェクトに関わっていた。それは10億ワットのレーザー装置であり、宇宙空間から発射してエイリアンを撃ち落とすためのものだった。それは電子=プラズマ光ビームと呼ばれている。それは宇宙空間の複数の発射台に設置されている。ほかに今では747の機体にもそれを積んでいる。一般向け科学雑誌の表紙にも載っている。それは彼らが開発した新しいレーザープラズマ装置だ。

そして私はロッキード社のスカンクワークにも携わった。国防契約会社のEG&Gの工場も沢山訪問した。そのひとつはラスベガスにあった。私がそこへしょっちゅう行った理由は、EHリサーチの仕事をしていた時、単発レーザーのテストをやっていたからだ。そして我々は後にEMP(electromagnetic pulse technology 電磁パルステクノロジー)として知られることになるテクノロジーの開発をしていた。私は計測装置を作るパイオニアのひとりだった。私はEMPテクノロジー開発の仕事を沢山やった。その仕事はいつも身近にあった。」

引用おわり

2. レッドライン2026年はET側からの通告だった。

グリアの話

名前を挙げるができない人物。議会の UFO 公聴会にも出てもらおうとした人物。

私は彼と出会い、実にたくさんの時間を一緒に過ごした。

彼は1990年代にネリー・コンプレックス・S4（通称エリア51）やエグリン空軍基地、ライトパターソン基地に勤務していた。

彼はこれら3つの重要施設で標的決定権のある諜報活動をしていた。

彼は現在トップシークレットの情報を見る資格を得て米国家安全保障局（NSA）と連絡をとりつつこの3つの大規模な施設の1つで働いている。

彼は百戦錬磨の経験を積んで米国家上院情報局員に昇りつめた。

そして米国防総省入省を目指し、それを成し遂げた。

しかし彼が入手し伝達した情報はすべてカーク・パトリック博士によって隠蔽された。

彼は信用できる人物であり、今我々のもとでフルタイムで働き、機密をすべて教えてくれた。

彼を守るために匿名にする。

彼は地球や地球外のコミュニケーションを盗聴する任務についていた。

もし地球人がこのままE T文明のテクノロジーをE Tたちに向けて使い続けるなら、

彼らは地球にやってきて問題を正すことになる、E T側からはっきり伝えられた。

彼はさまざまな機会に彼らがやってくるのは2026年だと聞いた。2026年か、

たぶんその少しあとに。

今は2024年だ。期限は2030年とか2040年ではない。

私は正確にいつかを予言することはできない。

時間はあるいみ幻だ。

しかし事の進行は終わろうとしている。残された時間はなくなりつつある。

世論、米国政府、英国、その他の国の動きは極めて緩慢であるのに対し、U S A P s

の隠蔽されたプロジェクトの動きは非常に速い。

そして彼らのテクノロジーはどんどん進化している。

そして我々人類は外宇宙にとってますます脅威になっている。

過酷な運命が訪れようとしている。

これは大問題だ。

(第6セッション)

追記

グリアは USAPs に関するデータすべてをディスクに収めて 2023 年 6 月のディスクロージャーの 1 週間前に上院情報・軍事委員会 (senate intelligence and armed services committees)、ホワイトハウス、大統領に渡してある。

国立の記者クラブをディスクロージャーに使えたのも彼らがデータをもらっているからだという。

下院監視委員会も同じデータをすべてもっている。

彼らが行動に出るのには十分だろうとグリアは言うが、どうだろうか。

このセミナーの最中にも、6 人か 8 人くらいの下院議員が下院議長に書簡を送り特別調査委員会が USAPs について調査してくれるように申し入れている。

しかしこんな緩慢な対応で間に合うか心配である。